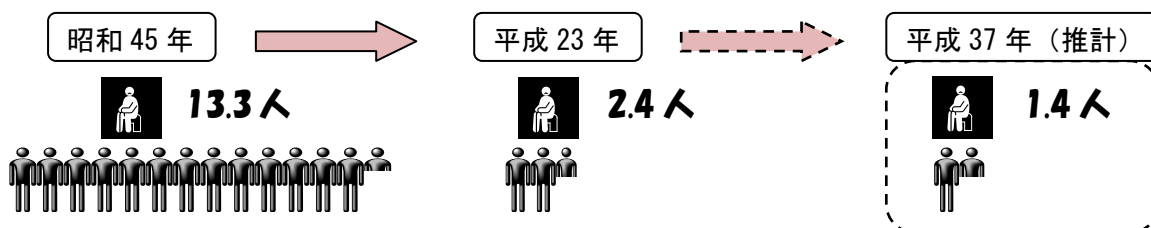
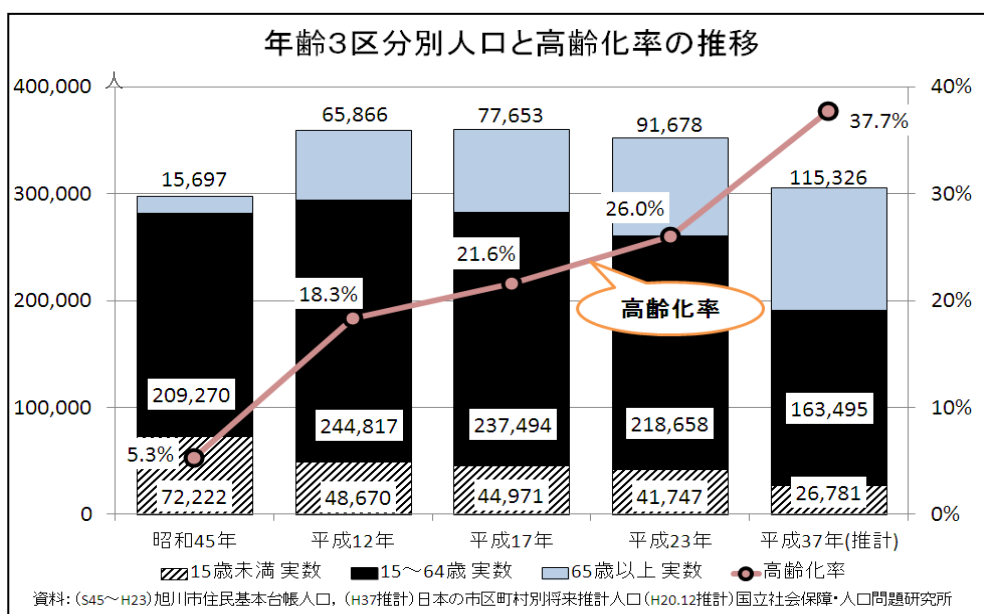
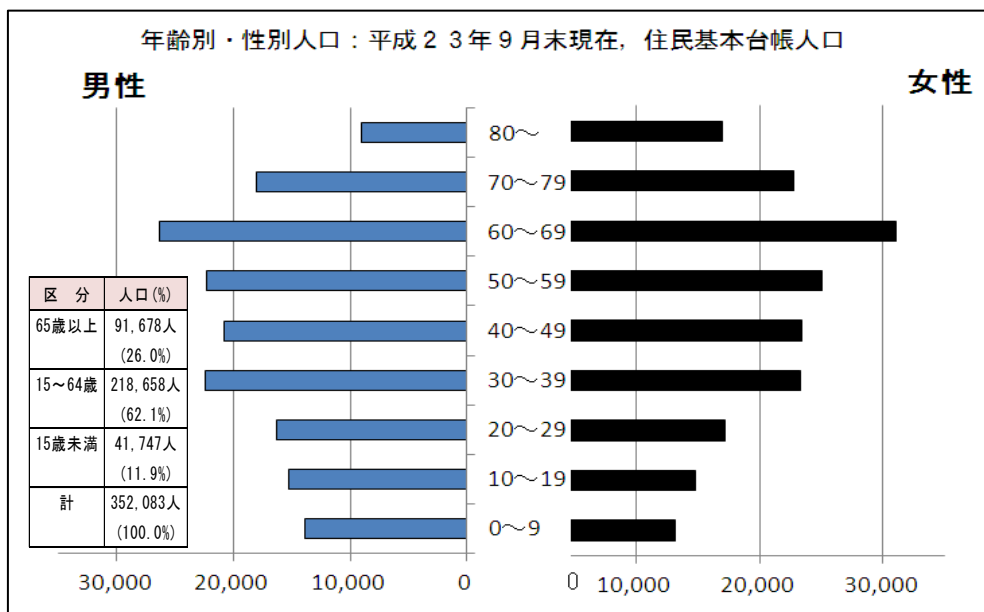


◆人口と年齢構成

全国的に少子高齢化が進み、本市でも65歳以上の人口増加と15歳未満の人口減少傾向が顕著となっています。

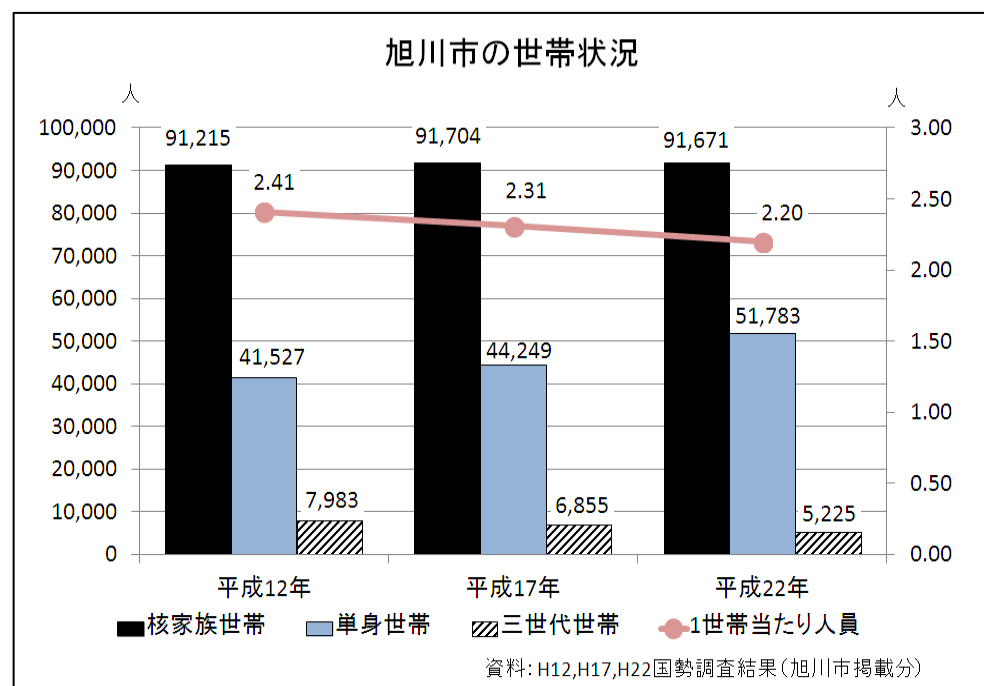
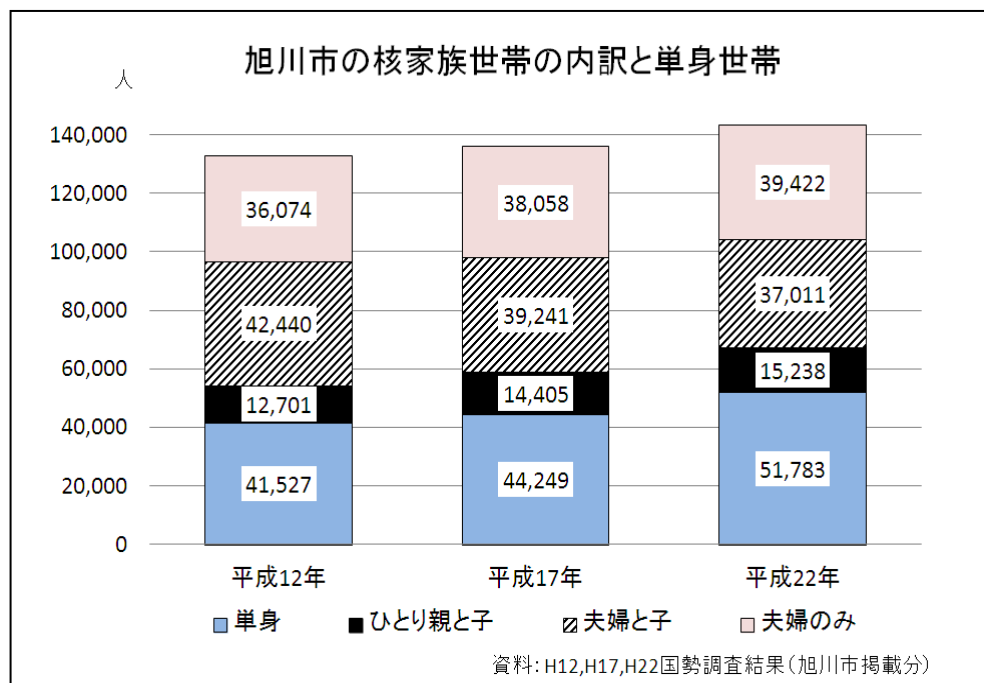
昭和45年（国勢調査年）から平成23年までの人口推移では、高齢化率は5.3%から26.0%になり、約4人に1人は65歳以上の高齢者となっています。また、平成37年の推計人口では高齢化率が大幅に増加し、人口は大きく減少することが予測されています。



65歳以上の高齢者1人に対して、それを支える現役世代(注1)の人数は急激に減少しています。

注1) 現役世代：労働力の中核をなす、15歳以上から65歳未満の人口層のこと。

核家族世帯（夫婦のみ、夫婦と子、ひとり親と子）の状況は、平成12年からの10年間で大きな変化はありません。しかし、核家族世帯の内訳を見ると「夫婦と子」が減少し、「夫婦のみ」と「ひとり親と子」が増加しています。また、単身世帯が増加する一方で、三世代家族や1世帯当たりの人員数は減少しています。



◆出生と死亡の状況

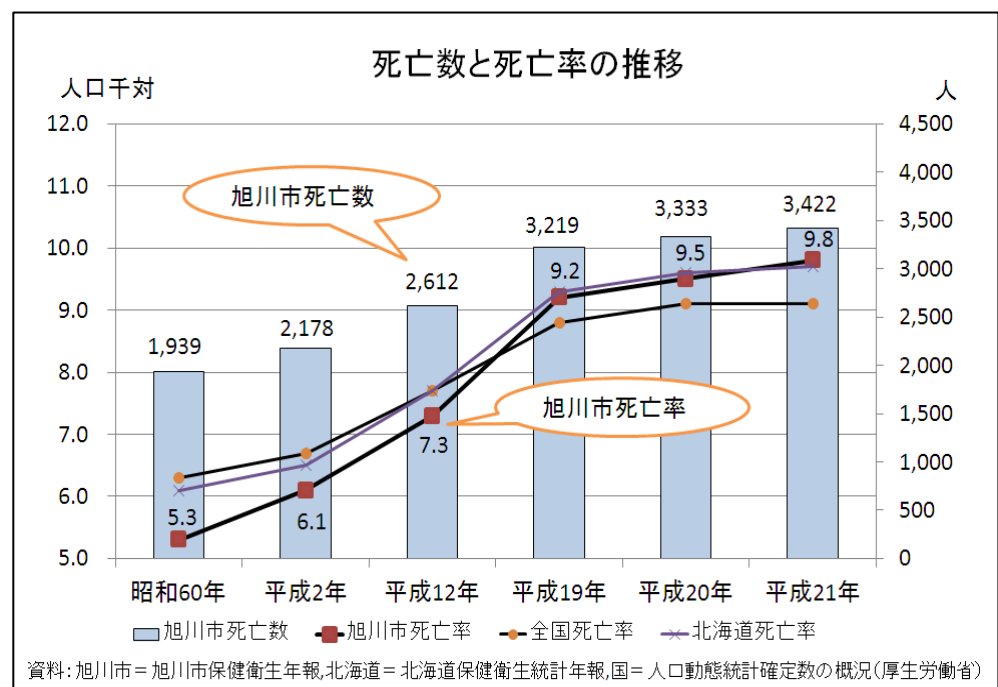
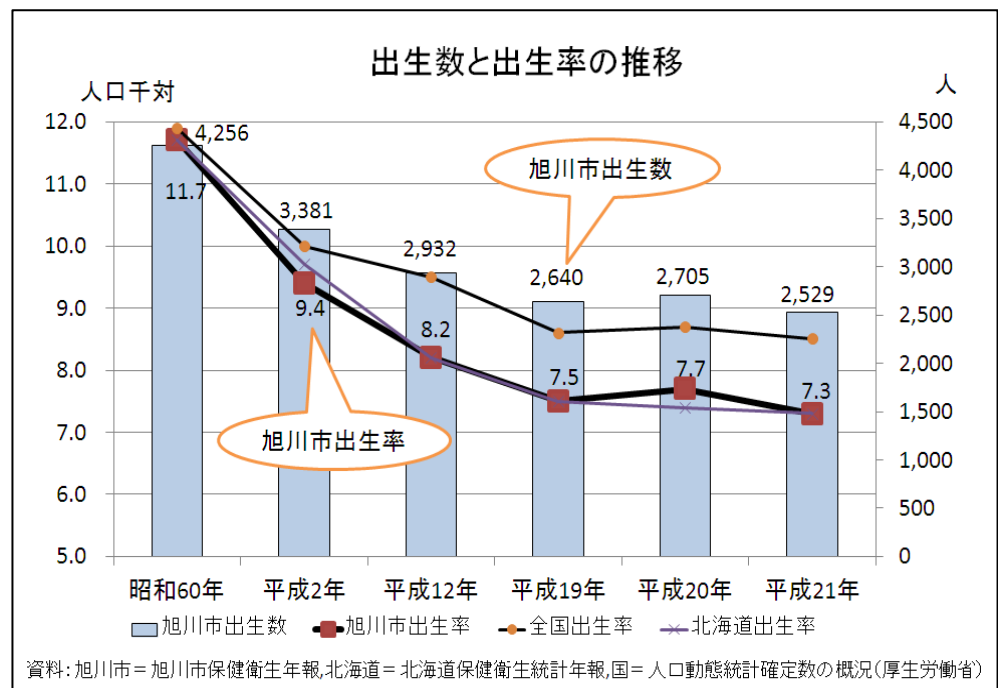
出生数は平成12年以降、3,000人に満たない状況で推移しており、全道と同様の傾向で減少しています。また、本市の合計特殊出生率（1人の女性が一生の間に産む子どもの数に相当する数値）は、平成16～21年の間で全国の数値をやや下回って推移しており、平成22年時点では1.24になっています。

なお、長期的に人口が維持されるために必要な水準は、この数値が2.07～2.08と言われているので、本市は急速に少子高齢化が進行していると考えられます。（旭川市次世代育成支援特定事業主行動計画後期計画より）

一方、死亡率は高齢者の増加に伴い年々増加しており、全国を上回る数値で推移しています。



平成22年旭川市の合計特殊出生率（1人の女性が一生の間に産む子どもの数に相当する数値）は**1.24**になっています。

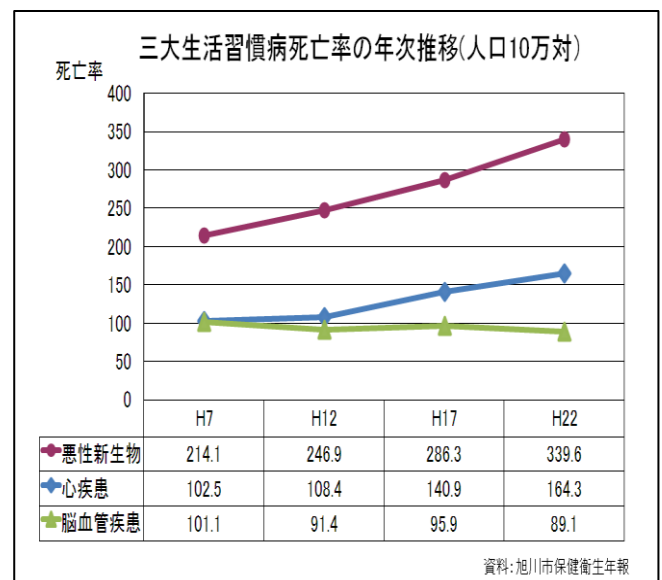
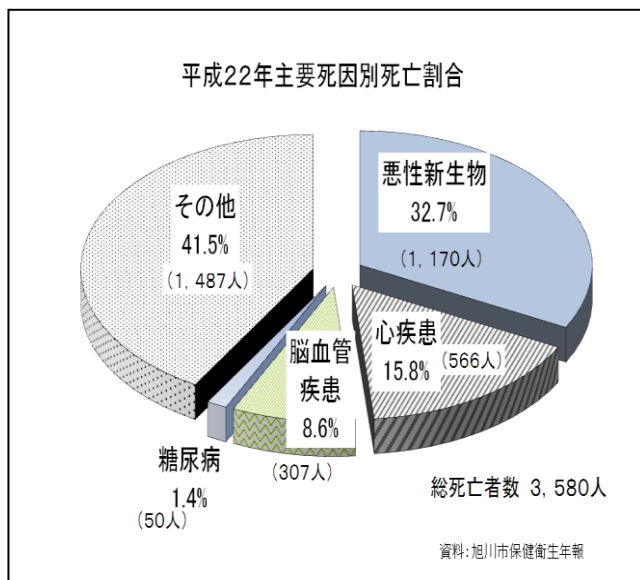


◆死亡割合と死亡率の推移

本市では悪性新生物、心疾患、脳血管疾患等が死因別死亡割合の約 6 割を占めています。また、悪性新生物や心疾患は平成 12 年から増加傾向にあり、脳血管疾患はほぼ横ばいの状況です。

本市の年齢階級別死因（平成 22 年）を見ると、15～34 歳では「不慮の事故」「自殺」、35～44 歳では「悪性新生物」「自殺」、55 歳以上では「悪性新生物」の割合がそれぞれ高くなっています。

出所：旭川市保健衛生年報



◆年齢階級別にみた死因別死亡割合

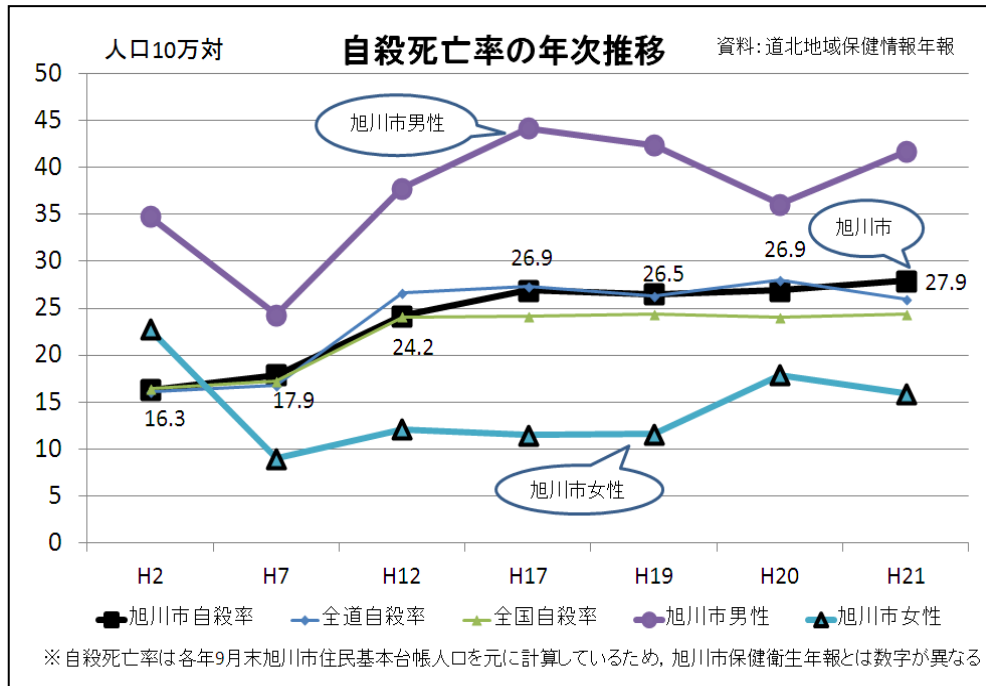
平成22年

年齢	死亡 総数 (人)	第1位		第2位		第3位		第4位		第5位	
		死因	死亡 割合	死因	死亡 割合	死因	死亡 割合	死因	死亡 割合	死因	死亡 割合
総数	3,580	悪性新生物	32.7	心疾患	15.8	肺炎	9.0	脳血管疾患	8.6	不慮の事故	3.4
0～4歳	3	先天奇形, 変形 及び染色体異常	66.7	乳幼児突然死 症候群	33.3						
5～14歳	2	悪性新生物	100.0								
15～24歳	17	不慮の事故	41.2	自殺	35.3	悪性新生物	11.8	肺炎	5.9	白血病	5.9
25～34歳	27	自殺	37.0	不慮の事故	25.9	悪性新生物	18.5	脳血管疾患	7.4	神経系の疾患	7.4
35～44歳	55	悪性新生物	27.3	自殺	25.5	心疾患	12.7	脳血管疾患	9.1	不慮の事故	9.1
45～54歳	115	悪性新生物	43.5	自殺	13.9	心疾患	7.0	脳血管疾患	7.0	不慮の事故	6.1
55～64歳	343	悪性新生物	46.1	心疾患	14.9	脳血管疾患	6.1	不慮の事故	5.2	自殺	4.4
65歳以上	3,018	悪性新生物	31.1	心疾患	16.6	肺炎	10.3	脳血管疾患	9.0	その他の呼吸器 系の疾患	3.4

資料：旭川市保健衛生年報

◆自殺死亡率

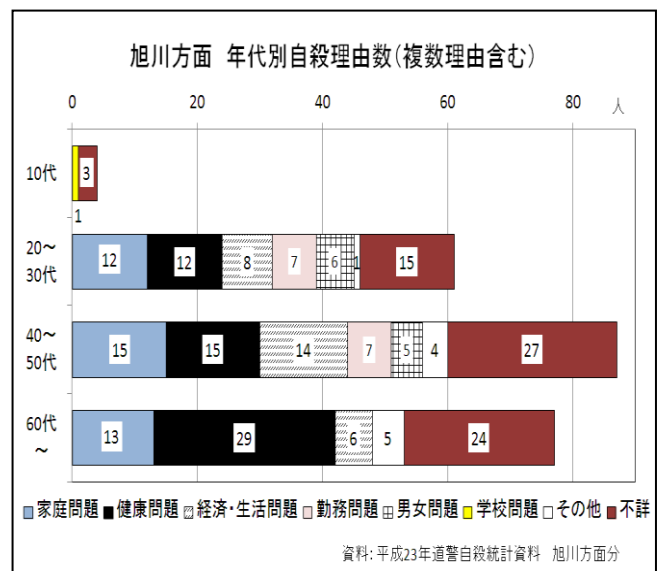
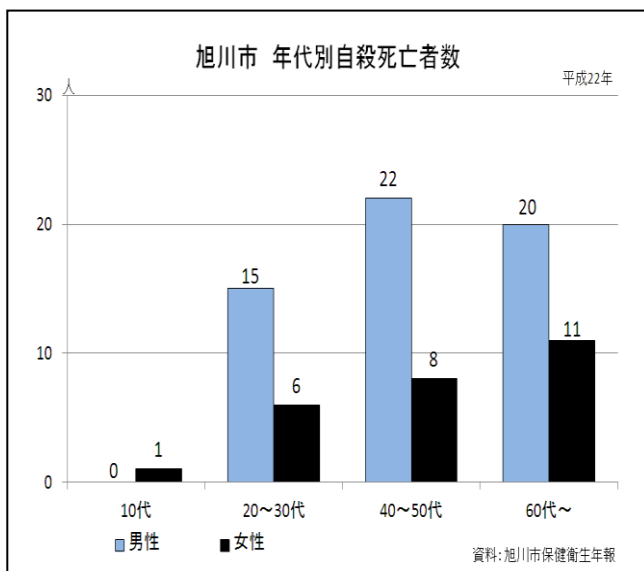
平成10年から全国の自殺者数は年間3万人を超えており、本市では毎年100人前後の方が自殺で亡くなっています。また、全国的に中高年、特に男性の自殺率が高く、本市も同様の傾向となっています。



旭川市の年代別自殺死亡者数は、40～50代の男性が最も多い結果となっています。

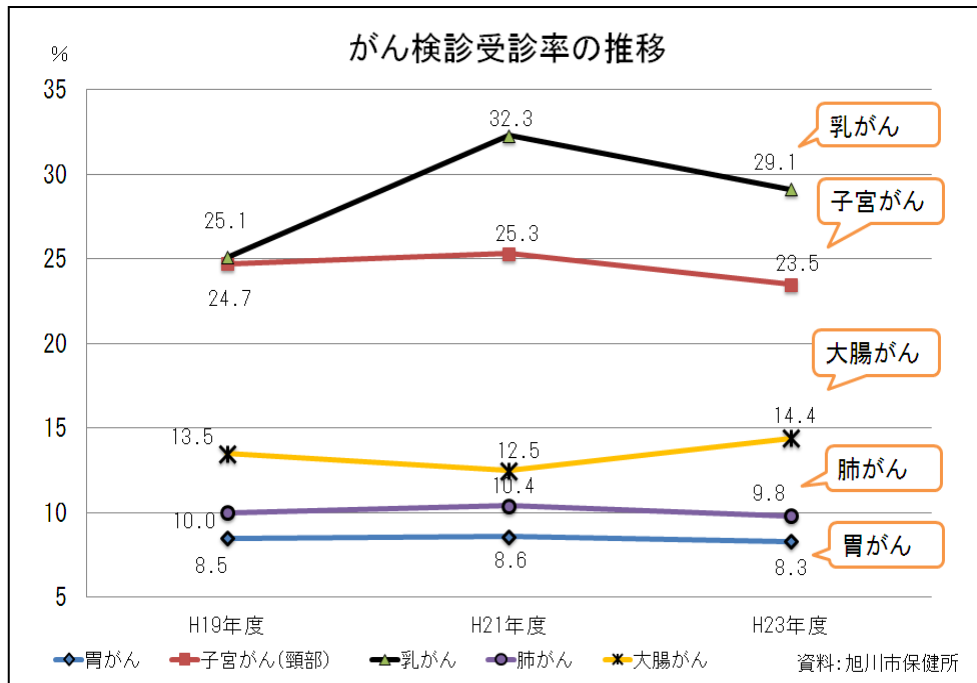
また、北海道警察旭川方面管内の年代別自殺理由では、20代から50代の働き盛りの年代では「家庭問題」「健康問題」「経済・生活問題」が約半数を占めており、60代以上では「健康問題」の割合がより高くなっています。

北海道警察旭川方面管内とは、旭川中央・旭川東以外の警察署（稚内、枝幸、天塩、美深、羽幌、名寄、士別、留萌、沼田、深川、富良野）の数も含んでいます。

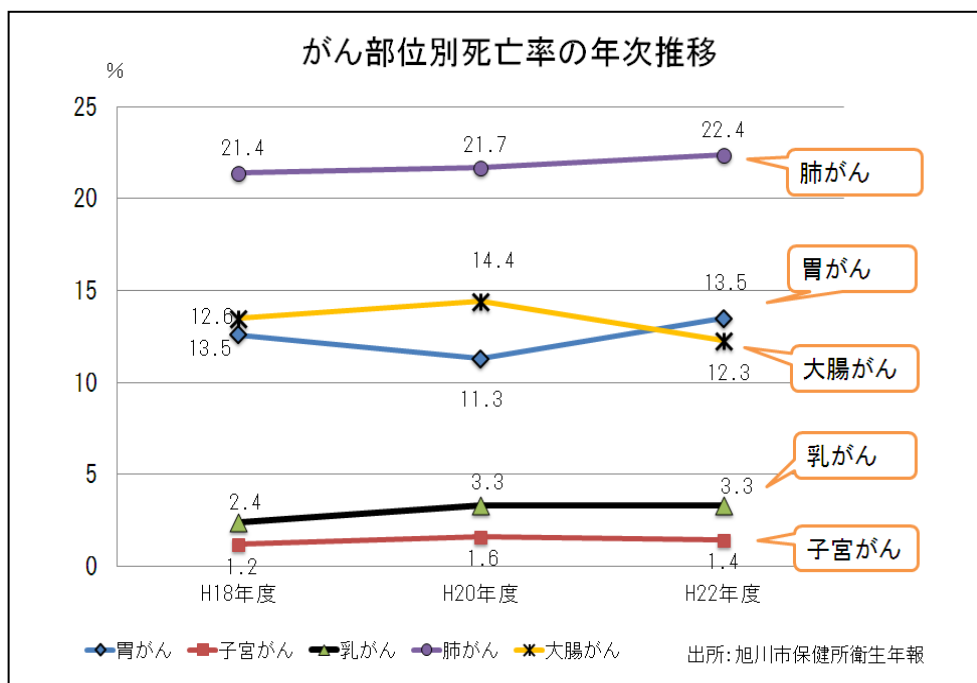


◆がん検診

がん検診受診率の推移を見ると、全体的に横ばいの傾向にありますが、乳がん、子宮がんの受診率は比較的高く、また、がん部位別死亡率では乳がん、子宮がんの死亡率は低い結果となっています。



※各がん検診の受診率は、平成20年度に厚生労働省から示された算定方式に準拠して算出したものです。



年に1度は特定健診やがん検診を受けましょう！！

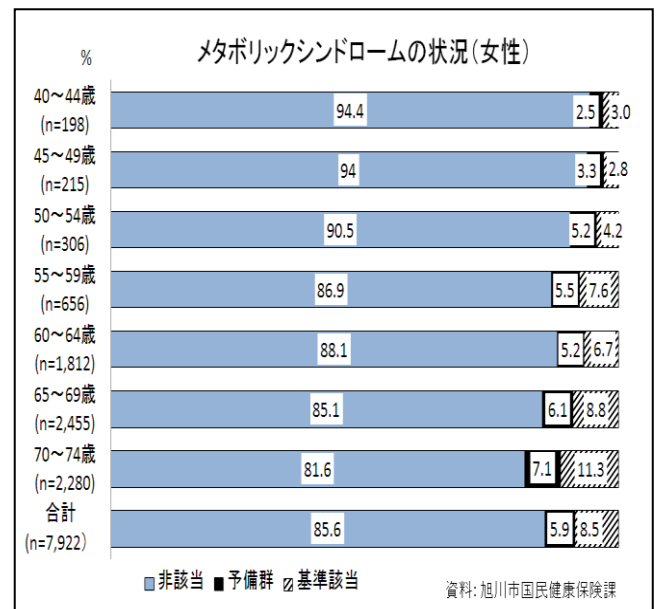
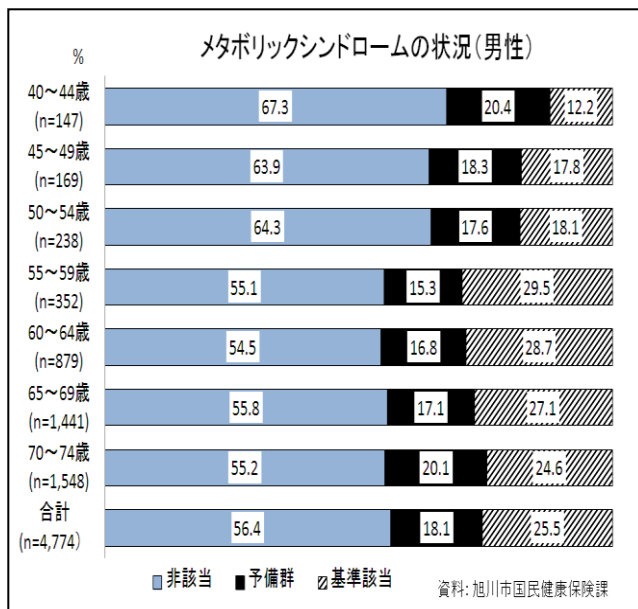
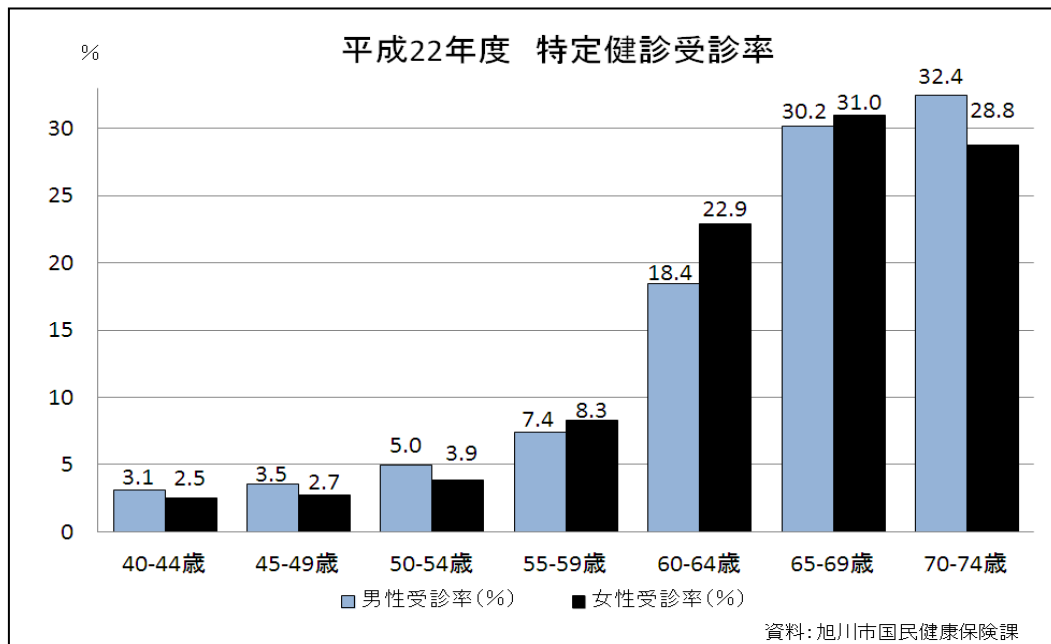


◆特定健康診査

平成22年度の40～74歳の国民健康保険加入者の健診受診者は12,696人（受診率20.5%）でした。

性別で見ると、男性は女性と比較して50～60歳代の受診率が低く、また年代別では年齢の上昇に比例して受診率が上昇しており、男女とも健診受診者のうち60～74歳が約8割を占めています。

なお、40～74歳では、男性は約2.3人に1人、女性は約7.0人に1人がメタボリックシンドローム(内臓脂肪症候群)を強く疑われる者(基準該当者)、または、その予備群と考えられる結果となっています。



腹囲が男性 85cm 以上、女性 90cm 以上で、3 つの項目(血中脂質異常、高血圧、高血糖)のうち
2 つ以上の項目に該当する者＝メタボリックシンドローム(内臓脂肪症候群)基準該当者
1 つに該当する者＝メタボリックシンドローム(内臓脂肪症候群)予備群

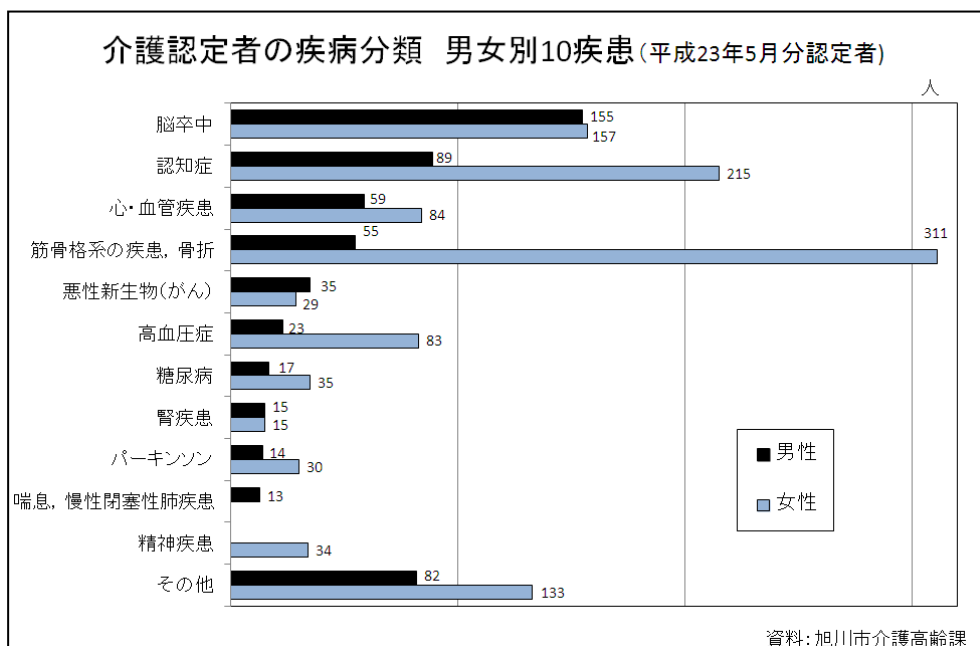
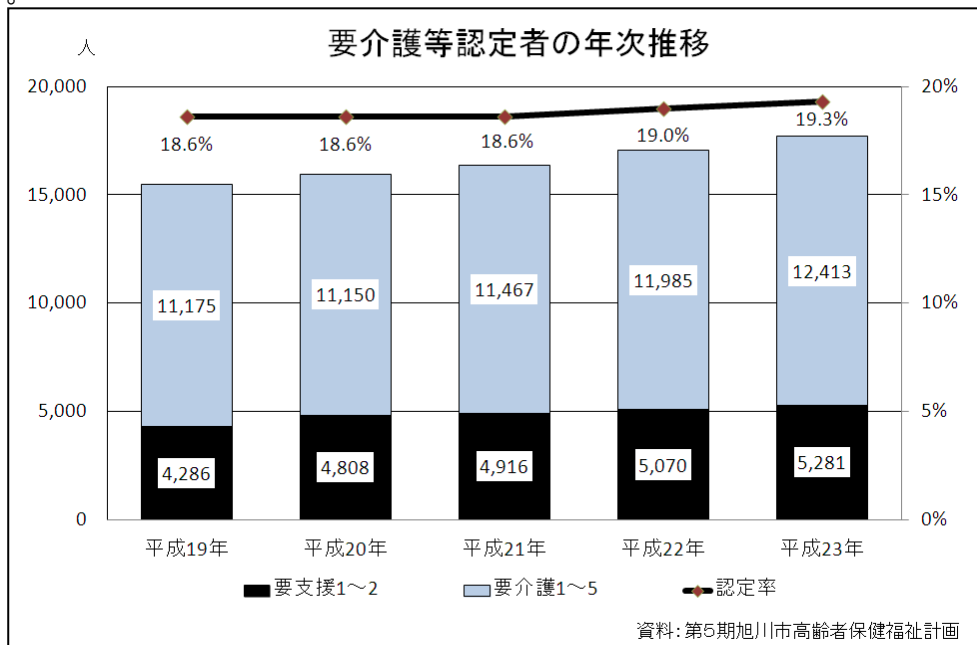
◆介護保険の状況

本市の要介護・要支援等認定者は、平成19年から平成23年の5年間で2千人以上増加し、平成23年9月末時点で17,694人、また、高齢者人口に占める認定者の割合は19.3%となっており、制度開始当初（平成12年：認定者8,071人、12.4%）と比べて認定者は大きく増加しています。

要介護等認定者が増加した背景としては、高齢者の増加はもとより、介護保険制度が市民に浸透したことや、事業所の開設が進み潜在的な要介護者のサービス利用が増加したことによるものと考えられます。（第5期旭川市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画より）

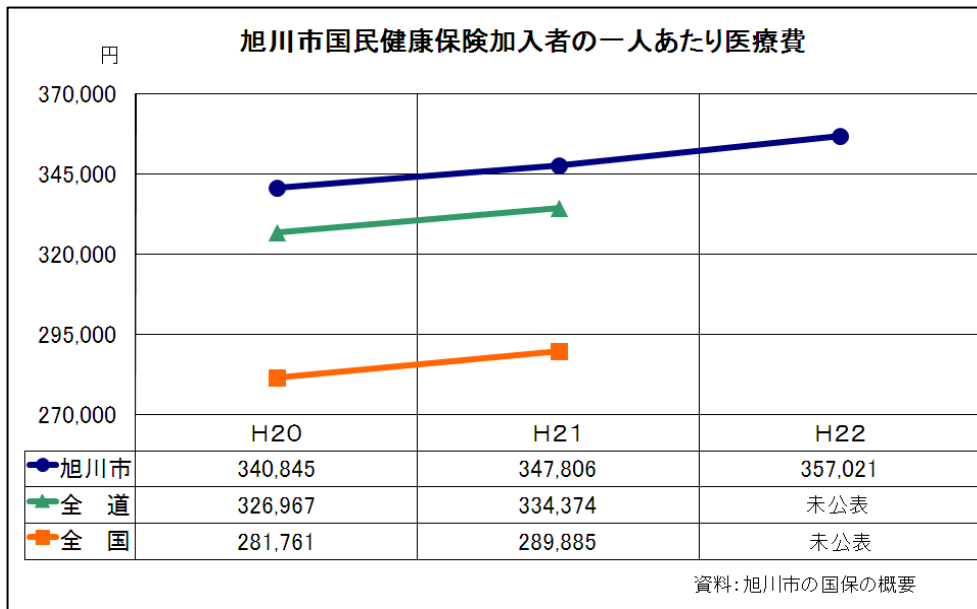
なお、介護認定者の疾病分類では、男性では「脳卒中」が最も多く、次いで「認知症」「心・血管疾患」となっています。女性では「筋骨格系の疾患、骨折」が最も多く、次いで「認知症」「脳卒中」の順となっています。

男女合わせて、動脈硬化性疾患（脳卒中、心・血管疾患、高血圧症、糖尿病、腎疾患）が643人で最大であり、より若い年代からの動脈硬化の予防が介護予防にとっても重要であることが分かります。



◆医療費の状況

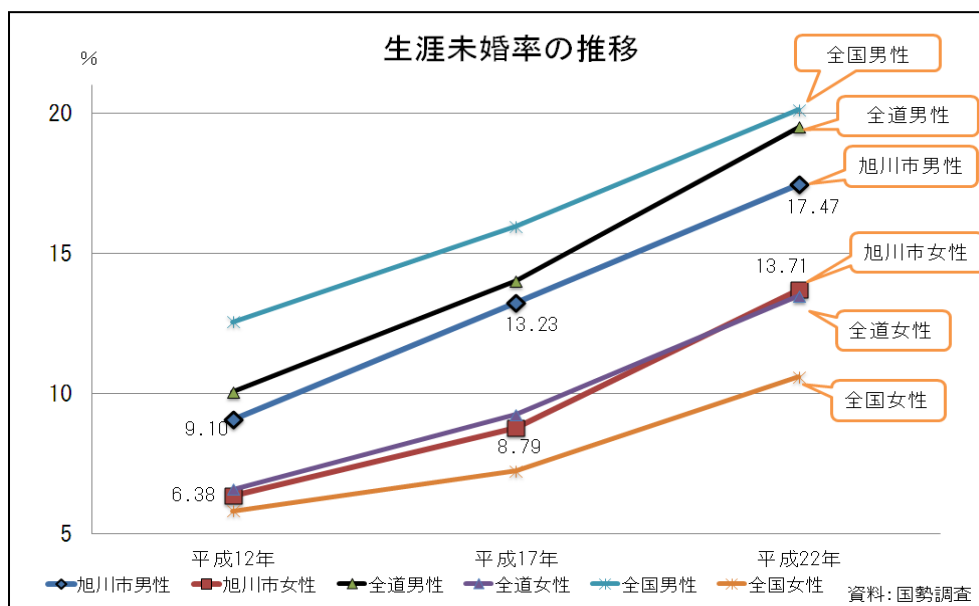
国民健康保険加入者1人当たりの医療費は平成20年度以降増加しており、全国・全道（全道の市平均）と同様の傾向で推移していますが、本市の1人当たりの医療費は、全国・全道（全道の市平均）と比較すると高い水準で推移しています。



◆生涯未婚率

50歳時点で一度も結婚したことがない人の割合を示す「生涯未婚率」は、全国・全道の傾向と同様に本市でも増加の一途をたどっており、特に男性で高い状況となっています。

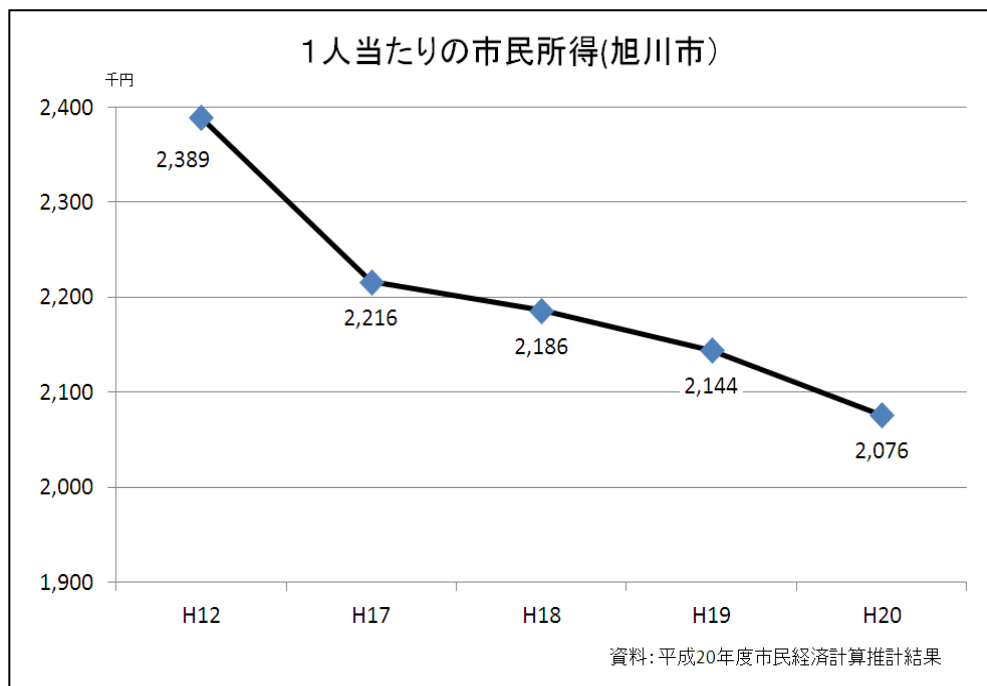
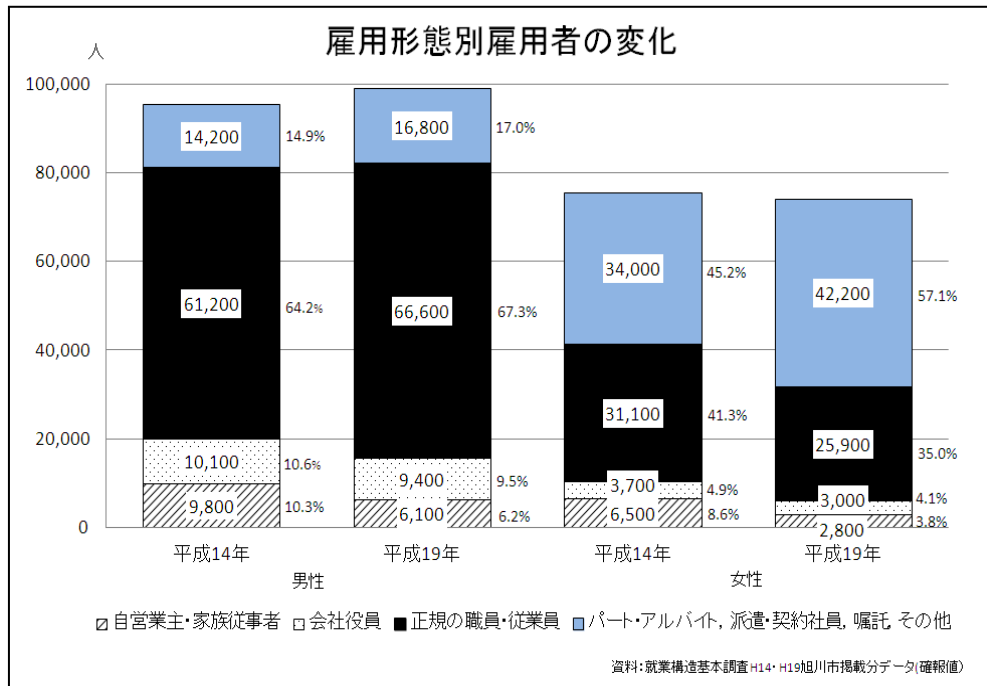
こうした状況から、将来、増加することが予測される単身世帯では、収入を支えるのが本人のみの場合が多いことや介護者がいないなど、病気や障害による生活への影響は大きくなりがちであるため、日ごろからの健康づくりが重要になります。



◆非正規雇用者数

女性は平成14年で約半数、平成19年には6割を超える人が非正規雇用となっており、男性も非正規雇用の割合が増加しています。また、市民1人当たりの所得は年々減少しています。

こうした経済的な余裕がない状況では、「健康づくり」に対する取組に費用（健診受診等の健康増進に必要な費用等）を割くことが大きな負担となる可能性があります。



注) 1人当たりの市民所得とは、市民所得の合計を基準日現在の人口で割った額です。

これは、地域の所得水準を比較する一つの目安になりますが、市民所得には法人所得等が含まれているため、個人の年間所得とは異なります。